

国際シンポジウム「都市問題再考：歴史・環境・メディア」をめぐって

会期：2024年1月27日-28日

会場：名古屋大学文系総合館7階カンファレンスホール

フォーリア・レザ

都市は、歴史を通して長らく発展し、商業、文化の中心となってきた。都市生活は、信号や看板から、次の目的地を告げる地下鉄の車内アナウンスに至るまで、多様なメディアによって構成されている。また現在では、住宅、エネルギーや通信インフラの問題、人口密度の増加、廃棄物、汚染などさまざまな問題が生じており、現代における人間と自然の関係を問い直すきっかけになっている。

都市というテーマ自体は複雑で、多面的で、変わりやすいものである。変容する都市の過去から現在また未来に向けて、1月27日-28日、名古屋大学文系総合館で開催された「都市問題再考：歴史・環境・メディア」の国際シンポジウムでは、歴史学、人類学、映像学、メディア研究、文学、建築学、倫理学、社会学、環境学などの研究者が一堂に会し、アジアの都市を中心に、学際的な視点から議論が行われた。

シンポジウムは、新世代パネル「[都市]と[周縁]から考える社会のありかた：学問・医療・文学・メディア」、セッションI「(ポスト)帝国の都市」、セッションII「都市環境」、セッションIII「メディア化された都市」という4つのパネルによって構成された。そして、最後に、全参加者の総合討論が行われた。シンポジウムは、企画者である藤木秀朗とトリスタン・グルーノの挨拶および趣旨説明から始まり、世界各地から集まった学者や学生たちが積極的に参加した。

新世代パネル「[都市]と[周縁]から考える社会のありかた：学問・医療・文学・メディア」

新世代パネルでは、若手や新世代の研究者が、中心対周縁論から都市という概念について議論し、学者、貧困層、女性、小都市での映画製作の体験などについて語り合った。

尾崎梨花(名古屋大学)は「江戸と国許における学者とネットワーク：仙台藩儒大槻磐溪の学問活動と政治」という題で発表し、江戸における学問の役割と、政治的・知的

自由のあり方における言論形成を分析した。次に、井ノ元ほのか(大阪公立大学)が、「巨大都市の貧困病者と救療：1920年代-30年代の大阪を事例に」と題し、大阪市における経済的に疎外された人々に対する保健医療や都市福祉援助について具体的に説明し、歴史的な資料なども提示した。江山(名古屋大学)は、「[農村]という空間を超えて：戦前期『家の光』の連載小説における女性表象」と題した発表の中で、雑誌『家の光』の大衆小説が、どのように都市における理想的な女性像を作り上げたかを説明した。最後に、聞豪(名古屋大学・ウォリック大学)は、「[まちづくり]時代の日本映画：文化観光、フィルム/コミッション、インフラ美学」と題して、濱口竜介監督の『ドライブ・マイ・カー』(2021年)や小田香監督の『GAMA』(2023年)などをとりあげ、映画製作、都市インフラ、地域振興の役割について論じた。その後で、討論者の尹芷汐(椋山女学園大学)からコメントがあり、企画者でもある朴成柱(名古屋大学)・北嶋玲子(名古屋大学)の司会で討論を進めた。主要な論点として印象に残ったのは、江戸時代から現代の都市文化に至るまで、女性の視点が見られないという重要な空所が発見されたことである。



セッションI: (ポスト) 帝国の都市

このセッションでは、天皇都市がどのように形成され、認識されたかが論じられた。長谷川香(東京藝術大学)は、「儀礼空間から読み解く皇都・東京」と題して、仮宮、常設展、往復の散歩道などの儀礼がどのように天皇都市・東京を形成したかについて述べた。トリスタン・グルーノ(名古屋大学)は、発表「帝国が故郷に帰る場所: 東京駅と帝都の汎帝國的創造」で、帝都のシンボルとしての東京駅やその建設、建築デザイン、利用など、皇室と駅の都市空間との相互関係を解明した。ヘレン・J・S・イ(延世大学)は、「国民歌謡: 音、情動、ポスト植民地のソウル」という発表で、ソウルの60年代と70年代を中心に、「健康的な大衆歌謡」や「クンミンカヨ」を推進する帝国イデオロギー、そしてノスタルジアと帰属意識の中で経験されるポストコロニアリズムのイメージを分析した。討論者の西澤泰彦(名古屋大学)からは、これからの都市空間を五感で読み解くというアイデアが提案された。その一例として挙げられたのは、歴史的な記述がほとんど残っていない名古屋大学豊田講堂だった。

セッションII: 都市環境

このセッションには、ロデリック・ウィルソン(イリノイ大学)、アンドレア・フロレス・ウルシマ(京都精華大学)、吉永明弘(法政大学)が参加し、自然に影響を与える都市化の問題を取り上げた。ウィルソンの発表「明治の東京計画における環境衛生について」は、東京の3つの水路と湾岸地域の改善プロジェクトに焦点を当て、燃料の過剰使用、工場廃棄物、魚や他の海洋生物の死滅状況などを分析した。一方、ウルシマは、「都市環境の時空間スケール: 北山杉に学ぶ物質流動と集積」の発表で、住宅建築の木材伐採とその影響を京都府の北山という一例で示して、口承史的な証言に基づいた考察を行った。吉永明弘の「都市の環境倫理: 人と環境の関係の価値」は、仙台市を事例として、街路樹を維持管理する様々なプロジェクトを探求し、自然と人間が共存し合う取り組みの意義を明確にした。討論者の宮脇勝(名古屋大学)は、全ての発表が、人間と自然の境界線に疑問を投げかけるものであると主張し、都市の自然資源の扱いにおいては、地域住民やコミュニティの役割を視野に入れる必要があると結論づけた。

セッションIII: メディア化された都市

セッションのパネリストは、アラスティア・フィリップス(ウォリック大学)、ウイニー・イー(香港大学)、マイケル・フィッシュ(シカゴ大学)だった。

フィリップスは「1960年代、勅使河原の東京: 移りゆく都市」で、安部公房の小説を映画化した『燃えつきた地図』(1968年)と『他人の顔』(1966年)の2作品を中心に、「移り変わる都市」のイメージに注目した。イーの発表「時間性、移動性、エネルギー: 映画における都市香港の(非)構築」は、香港映画における自転車とトラムのイメージとともに、パトリック・タムの『烈火青春』(1982年)に現れているくつろぎ場としてのトラムというアイデアを提案した。トラムは、都市の急速な発展の中で必要不可欠な「移動しない時間」を提供している手段になりうると論じられた。一方で、フィッシュは、「電車、都市、メディア: テクノ-エコロジーへの転導的アプローチ」で、乗り物の定義を新たな観点から見直す必要があると主張した。東京の電車の可能性が無限だという発言から始め、機械化、都市化やエコロジーの中の電車が担う役割を分析した。討論者のステファニー・デボア(インディアナ大学)は、全ての発表で考察された思考法について述べた後、「将来には果たして希望がある」かと問いただした。

最後にシンポジウムの幕を締めくくったのは、藤木秀朗の司会による総合討論であった。主な提案として挙げられたのは、都市経験の多様な「読み方」、高速交通機関の再考察、急速都市化と生産における時空間の分析などだった。くわえて、自然環境的、資本主義的、植民地的な影響が都市の現在・将来を変えていく過程も注目された。これらの論点は、様々な観点を視野に入れて都市のイメージを考え直すきっかけとなり、およびシンポジウムの主な成果でもあるといえるだろう。